青年の生活に対する態度の特質に関する研究*

北海道学芸大学

岡 路 市 郎**

I 問 題

いわゆる態度の研究は社会心理学の領域におけるものとも輝かしい業績の一つに数えられるものであるが、近年の心理学諸領域の相互接近的傾向は、この研究方面にも現われて人格心理学はもちろんのこと、発達心理学、あるいは知覚や学習の領域にまで、態度の概念が登場して、ますます拡大強化されるようになりつつある。

このような傾向は元来、具体的な人間生活の現象の場における様々な課題によつて促進されるものであつて、いわば、論理的実証と生活の課題との具体的接近を物語るものである。教育の作用は、人格とその社会的条件の規制を中心課題としながら、多くの問題領域の解明を、この態度研究の発展に結びつけて期待している代表的な存在であるが、法律・道徳・慣習その他の生活規範や価値体系の急激な変革期にあつて、インフォーマルなあるいはフォーマルな社会事象が人間形成に重大な影響を与えつつあることを思う時、態度の形成・変容の問題がその基底的条件と関連して特に注目されなければならないと考える。

著者らはかつて、青年を主要対象として現実のさまざまな社会事象に対する社会態度 social attitudes の因子分析的研究を行つたが³⁾、このような態度構造の内容的分析とあいまつて、態度の形成変容の過程をその規定要因との関連においてとらえることを将来への課題としてきた。この課題方向に対しては、態度・行動を集団機能との関連においてとらえようとする最近のグループ・ダイナミックス研究の一領域が、これに新たな展開を与えたものである。

この領域についてはすでに数多くの注目すべき業績があるが、最近における主要な問題点は、集団規準設定に伴う集団成員の態度・意見・行動等の斉一性 uniformity

あるいは同調性 conformity の効果に関する研究方向である。Sherif, M. (15) の古典的実験である自動運動知覚におよぼす集団の枠組 collective frame of reference の効果や、Lewin, K. (10) の集団決定 group decision の行動変容におよぼす効果の比較研究等を先駆として、最近では Asch, S. E. (1) らをはじめとする規準効果の条件としての多数効果 majority effect の研究^(4, 6, 7)、同様の条件としての集団凝集力の効果^(9, 10)、あるいは集団規準設定の方法と規準効果の関係^(2, 9, 10, 11, 12)等々の研究が発展分化してきた。

われわれはこれらの主題のすべてに、青年の態度形成ならびに変容の問題を結びつけて発展させることはしばらくおき、当面の課題として、青年の自ら育てつつある人生・生活に対する生き方の態度の確定性の度合と変容の方向量とを、仲間集団の討議にもとづく規準設定の効果との関係において実験考察することを企図した。研究の目的は次の2点に要約される。1つは青年がもっている人生もしくは生活に対する信念あるいは態度の構造的、内容的特質を、その目的のために作成された態度尺度をつかつて測定しこれを検討することである。もう1つは、それらの態度傾向が、実験的に設定された集団討議の過程によつてどのように変容するかを調べて、青年のもつ生活態度の確定もしくは不確定性の特質を明らかにすることである。

II 生活態度の測定

方法と手続

調査対象は札幌市内S短大生男女合計157人である。sampling が不十分であるから当然これから青年一般を結論することはできないが、青年学生の態度構造の特質のおおまかな傾向を推定することはゆるされるであろう。なおこれを他集団との比較において検討する意図をもつて、35~45才の社会人58人をも調査の副次的対象とした。これらの人々は、官吏、実業家、教師、会社員、主婦等からなり、いずれも知的にやや高い階層からランダムに選択されたものである。

* Studies on characteristics of adolescents' attitudes toward life.

** by Okaji, Ichiro (Hokkaido Gakugei University)

生活態度測定尺度は予め次のような手続をへて作成された。「社会にはいろいろな生活のいとなみがあるが、これらの中にはどのような種類の生き方があるか。」という質問に対する学生約40人の回答を分類整理したものを原案として、字句・内容の修正を行い最初36個の item をえた。これを約60人の学生に与え、Thurstone, L. L. の伝統的な手法にならつて11段階に分類させた。その結果を整理して四分偏差Qの値の著しく大なるものを除いて20 items にしぼつた。この20 items に対する学生の反応をもとめた結果、分布の極端な偏りをしめた「人生を地味に確実に生きていく」その他の4項目をけずつて、現在の16 items とした。この16個の statement をもつてつくられた態度調査用紙が Table 1 に示されるものである。

調査は、学生対象では講義の合間を利用して一斉に施行し、成人対象では主として個別訪問によつて反応をもとめた。いずれの場合も、被験者が尺度上の目盛に反応し終えたら、自己の回答に確信がもてるかどうかを吟味するために再度反応を試みるように要請した。

結果と考察

態度項目別の反応傾向：6段階の回答尺度+3, +2, +1, -1, -2, -3 のそれぞれの反応頻数百分率をだし、さらに +3 以下6個の段階を 6, 5, ……1 の段階点にきりかえて、Mdn と Q を算出したものが Table 2, 3 である。学生群において、Mdn が 5.0 以上の項目、つまり Ss の50%以上が「文句なくぜつたい賛成」もしくは「すこしは異議があるが一応賛成」の回答を与えた項目は、「その日その日をくよくよししないでくらす」(8), 「自分の思うこと好きなことを自由にできるだけ多くやつていく」(11), 「とりこし苦勞をせずに現実只今に全力をつくす」(13), 「金や名譽を考えずに、自分の趣味にあつたくらしをする」(12)の4項目である。

Mdn が4の段階、つまり Ss の半数以上が「一応賛成」もしくはそれ以上の肯定的な反応をしめた項目は「自分のどんな行動に対しても他人から干渉されずに生活する」(7), 「深刻にならずに平凡にのんきにくらす」(10), 「愚かなドンキホーテといわれてもよい、真実をもとめて生きる」(14), 「世の中の不正や虚偽をのぞく

Table 1 調 査 用 紙

○次の基準にしたがつて尺度の目盛の上に○印をつけてください。

- ・文句なくぜつたい賛成……………+3
- ・すこしは異議があるが一応賛成……………+2
- ・大いに異議があるが二者択一の賛否をとられたらまず賛成……………+1
- ・大いに理解できるが二者択一の賛否をとられたらまず反対……………-1
- ・すこしはわかる点もあるが一応反対……………-2
- ・文句なくぜつたい反対……………-3

	-3	-2	-1	+1	+2	+3	
1 暗いこと愚かなことが多すぎる、とても人生には希望をもてない							1
2 生きることにとりたてて意義をみとめない							2
3 まじめに努力してみてもどうせ先はしれている							3
4 いくらあせつてみてもなるようにしかならない							4
5 人生は宝くじをひくようなもので「運」が支配する							5
6 金がすべてを解決する、はたらいて金をもつことだ							6
7 自分のどんな行動に対しても他人から干渉せずに生活する							7
8 その日その日をくよくよししないでくらす							8
9 真実を探求できたらあとは何もいらぬ							9
10 深刻にならずに平凡にのんきにくらす							10
11 自分の思うこと好きなことを自由にできるだけ多くやつていく							11
12 金や名譽を考えずに自分の趣味にあつたくらしをする							12
13 とりこし苦勞をせずに現実只今に全力をつくす							13
14 愚かなドンキホーテといわれてもよい、真実をもとめて生きる							14
15 世の中の不正や虚偽をのぞくために闘う、その結果不利益をうけてもよい							15
16 名譽も報酬もいらぬ、世の中のためになることをまじめにやつていく							16

Table 2 Adolescent の反応

item	Mdn	Q	1 (-3)	2 (-2)	3 (-1)	4 (+1)	5 (+2)	6 (+3)
	%	%	%	%	%	%	%	%
1	2.42	0.73	34.2	37.8	14.9	7.5	3.7	1.9
2	2.31	0.70	38.9	35.7	12.7	6.4	4.5	1.9
3	2.32	0.82	40.3	31.2	13.4	7.6	4.5	3.2
4	2.97	1.17	21.7	29.3	17.2	15.3	12.7	3.8
5	3.01	1.08	21.7	28.0	21.0	15.3	9.6	4.5
6	3.34	1.22	16.6	28.7	14.0	21.7	13.4	5.7
7	4.50	1.18	7.6	15.3	16.6	22.9	26.1	11.5
8	5.88	0.83	0.0	7.0	5.1	15.9	24.9	47.2
9	3.88	1.22	12.1	17.8	22.9	19.1	20.4	7.6
10	4.50	1.11	5.7	15.9	15.9	26.1	27.4	8.9
11	5.48	0.75	1.3	5.7	2.5	20.4	36.3	33.8
12	5.30	0.74	0.6	5.1	7.0	25.5	38.9	22.9
13	5.42	0.86	0.6	5.7	8.9	21.0	33.1	30.6
14	4.72	0.92	1.9	11.5	15.9	28.7	30.6	11.5
15	4.78	0.86	1.9	11.5	13.4	29.9	31.2	12.1
16	4.77	0.83	2.5	7.0	16.6	29.3	33.1	11.5

Table 3 Adult の反応

item	Mdn	Q	1 (-3)	2 (-2)	3 (-1)	4 (+1)	5 (+2)	6 (+3)
	%	%	%	%	%	%	%	%
1	2.63	0.75	20.7	43.1	19.0	3.4	13.8	0.0
2	2.21	0.70	43.1	32.7	12.1	1.7	10.3	0.0
3	2.01	1.07	44.8	20.7	13.8	5.2	15.5	0.0
4	3.25	1.34	12.1	36.2	6.9	18.9	22.4	3.4
5	3.08	1.09	13.8	34.5	22.4	8.6	17.2	3.4
6	4.62	1.33	8.6	17.2	10.3	22.4	27.6	13.8
7	3.45	1.45	18.9	24.1	15.5	13.8	18.9	8.6
8	6.17	0.68	3.4	5.2	1.7	10.3	18.9	60.4
9	4.63	1.29	3.4	20.7	17.2	13.8	31.0	13.8
10	5.10	1.29	6.9	12.1	8.6	20.7	17.2	34.5
11	5.41	0.87	0.0	5.2	6.9	25.8	29.3	32.8
12	5.19	1.44	10.3	17.2	3.4	10.3	46.5	12.1
13	6.03	0.68	0.0	0.0	5.2	15.5	27.6	51.7
14	5.01	1.03	0.0	10.3	13.8	20.7	27.6	27.6
15	5.27	0.87	0.0	3.4	18.9	17.2	39.6	20.7
16	5.36	0.54	5.2	1.7	0.0	24.1	53.4	15.5

ために闘う、そのために不利益をうけてもよい」(15), 「名誉も報酬もいらぬ、世の中のためになることをまじめにやしていく」(16), の5項目である。

一方の否定の極により近いものをみると, Mdnが2の段階のものとして1, 2, 3, 4の4項目があがってくる。これらはいずれも生活態度としては消極的, 虚無的, 諦観的な暗いものであるが, Ssの50%以上が「一応反対」もしくは「文句なくぜつたい反対」の反応をしめたこ

とになる。

これらの反応型を概観して推定されることは, およそ次の3点である。

(1) 学生群がもつとも肯定的な反応をしめた生活態度は, 平凡・無理想・安易・個人中心・実利主義等の概念をもつて指示されるような態度傾向である。

(2) 次に肯定的な地位をしめた生活態度は, 奮闘・建設・精神主義・理想主義・社会中心等の態度方向である。これらは(1)の生活態度に次ぐものであるが肯定的反応である点においては同等である。ここに青年の両極性 bipolarity とよばれる一般的傾向の反応をみることができるようである。

(3) いわゆる虚無的・諦観的生活態度は青年一般をうまく支配する傾向性ではなくて, 大部分のもの(80%~85%以上)はこのような生き方に否定的である。

以上の傾向を35~45才の成人群と比較してみるとどうであろうか。成人群の反応中 Mdn 5以上を示す項目は, その数値の高い方からいって項目 8, 13, 11, 16, 15, 12, 10, 14 の8項目であり, これに次ぐ Mdn 4以上の項目は 9, 6 の2個である。以上10個の項目が肯定的に傾斜するものであるが, 否定的項目と推定されるものは数値の低い方から列挙して 3, 2, 1, 5, 4, 7 の6項目である。これらの成人層の傾向との比較において, 青年学生群の特質を要約すると, 次のような点があげられる。

(1) 反応の数値のパターンのみからみると, 青年の反応傾向は成人群と比較して著しい差異をもつてはいない。たとえば, 青年群の両極性的傾向は彼らの独占的傾向ではなくして, 成人群もまた, 安易・平凡・小市民的生活態度を望むと同時に精神主義的, 理想主義的生活態度を志向している。

(2) ただし学生群はいくつかの点で成人群とは異つた反応傾向を有している。概括的にいって学生群はより実利主義的, 個人中心主義的である。成人群がより純粋な理想追求の夢を有しているかに見えるのに, 若い世代がこの点においてやや劣位に立っているのは注目すべきことである。

態度因子の合成点別の反応傾向: 次に16個の item の背後に潜むと思われる, より基本的・機能的な生活態度因子を基礎として, 学生群の反応傾向を成人群との比較において検討した。

因子分析は検査対象 157 人中からランダムに 100 人を取り, おおよそ次の手続によつて行つた。質問項目に対する6段階の反応カテゴリー中, +3, +2, +1 にチェックした反応を一括して肯定反応プラスとし, -3以

下のカテゴリーに反応したものを結合して否定反応マイナスとして、項目毎に 2×2 分割表を作成、Jenkins, W. L. (8) の tetrachoric γ の修正法をつかつて相関行列を算出した。次いで Thurstone, L. L. (16) の完全重心法: the complete centroid method によつて重心因子行列をもとめ、さらに直交性単純構造(5)を示すように軸回転を行つて Table 4 に示す因子行列をえた。求めた結果は必ずしも望ましいものではないが、一応説明可能と思われる4個の生活態度因子——Ⅰ虚無的・消極的・運命論的態度、Ⅱ感覚的・実利的・個人主義的態度、Ⅲ建設的・精神的・社会中心的態度、Ⅳ平凡・安易な小市民的態度——を推定しえた。(Table 4) これらの4因子のそれぞれに高い負荷量をしめす item 群(Ⅰ——1, 2, 3, 4, 5: Ⅱ——6, 7, 11: Ⅲ——15, 16: Ⅳ——8, 12)に対する学生と成人のそれぞれの反応の合成点 composite score をもとめた上、両群についてそ

Table 4 直交因子行列

	factor					h ²
	I	II	III	IV	V	
1	.64	.23	.31	-.32	.24	.72
2	.70	.14	.39	-.23	.19	.75
3	.71	.05	.04	-.05	.24	.57
4	.60	.31	-.22	-.35	.44	.82
5	.76	.37	-.02	-.14	-.08	.74
6	.19	.58	-.37	.10	.08	.53
7	.28	.49	.11	-.29	-.12	.44
8	-.06	.14	.02	.79	.14	.67
9	.03	-.03	.29	-.08	.69	.57
10	-.14	.14	.10	.06	.62	.44
11	-.34	.74	.28	.03	.14	.76
12	-.28	.35	.41	.45	.00	.57
13	-.28	-.06	.38	.16	.41	.42
14	-.11	.36	.43	.12	-.15	.36
15	.00	-.15	.83	.13	-.07	.75
16	.29	-.22	.62	.30	.10	.62

Table 5 因子合成点の比較

		I	II	III	IV
Adolescent N=157	$\bar{x}$	2.45	3.90	4.16	4.83
	S. D.	1.26	1.57	1.22	1.17
Adult N=58	$\bar{x}$	2.59	3.95	4.62	4.60
	S. D.	1.40	1.58	1.14	1.61
t		n. s.	n. s.	2.55 p < .02	n. s.

の平均値を算出して比較考察の対象とした。(Table 5)

Table 5 に現われた結果を要約すると、およそ次のことがいえる。

(1) 虚無的・消極的・運命論的生活態度に対しては、両群ともに相当強い否定的反応をしめし、両群間にはほとんど差異はなかつた。

(2) 感覚的・実利的・個人主義的生活態度に対する反応は、両群ともに中立よりやや肯定的な極に傾き、両者間には総合して本質的な差異はみられなかつた。

(3) 建設的・精神主義的・社会中心的生活態度に対しては、学生群が中立より若干肯定的方向に傾き、成人群はそれより一層肯定的に反応した。この場合の両群の差は統計的に有意であつた。これは前述の item 別の比較の結果に符合する。

(4) 平凡・安易な小市民的生活態度に対しては、両群ともに著しく肯定的な傾向を示し、両群間に明らかな差異はみられなかつた。

以上述べてきた項目別ならびに因子別の反応傾向を通じて推論できることは、個人主義、自由主義、プラグマティックな思想等々のいわゆる戦後の思想が、青年学生の柔軟な心情を相当に規制しているということである。しかしこれらの影響は35~45才の壮年層にもある程度浸透していると推定してよく、いわば社会一般の思想的底流となつて、広範な階層の生き方の態度に現実的な圧力を加えているといえそうである。

III 態度変容の実験

方法と手続

前述の検査対象となつた学生 157 人中から実験群47人と統制群 67 人を選択した。前者は予め実施した sociometry test の結果を参考として集団凝集性の面からほぼ等質と思われる9群の小集団に編成され、前後2回の生活態度検査の中間に集団討議を挿入するように計画された。討議は pretest 実施後4日目と5日目に各々30分間、(集中講義の時間の一部を利用して実験を行つた関係上、buzz session 形式で実施)「今日の社会にいかにか生きるべきか」の主題で行われた。posttest は2回目の討議が終了した後、2時間の実験とは無関係の講義をはさんで実施した。集団決定に関する形式的な操作は行わず「できるだけ結論に導けるように話し合いをすすめてほしい」と教示するに止めた。後者の統制群には実験群と同一の態度検査を、同一の期間をおいて2度実施した。

結果と考察

討議過程の効果: 集団討議の中心的論点は、observer の記録によると、集団間に多少の差異はあれ、主として

個人中心の生き方と社会中心の生き方の問題、理想主義的態度と現実主義的態度の論議に焦点づけられた。したがって集団討議過程の効果を検討する視点を限定して、第Ⅲ、第Ⅳの態度因子における反応の変容を当面の基準とした。その結果は Table 6 の通りで、明らかに討議効果の存在を立証した。表中 change 1, 2, 3, 4 とあるのは、+3, +2……-3 の 6 段階の反応カテゴリーに対する、pretest と posttest との間の変動の程度をしめす。たとえば pretest で +1 に反応した者が posttest で -1 に反応した時は one step の変動で change 1 にいれ、+2 から -1 に変動した者は change 2 のカテゴリーにいれる。この場合肯定、否定への方向は問題外とする。なお +3 から -3 への変動および -3 から +3 への変動、つまり change 5 は、cont. exp. の両群を通じて皆無であつた。表中、両群の f の数値は Ss の数ではなくて、Ss の反応の個数を示す。

次にこの討議効果を Osgood, C. E. ら(13, 14)の D(x)

Table 6 討議過程の効果

factor group response	Ⅲ				Ⅳ			
	cont.		exp.		cont.		exp.	
no change	f	%	f	%	f	%	f	%
change 1	62	46.3	30	31.8	67	50.0	30	31.8
— 2	59	44.0	42	44.7	56	41.8	42	44.7
— 3	13	9.7	19	20.2	9	6.0	15	16.0
— 4	0	0.0	2	2.2	1	0.7	6	6.4
— 5	0	0.0	1	1.1	1	0.7	1	1.1
$\chi^2=11.45$ p<.05				$\chi^2=14.62$ p<.01				

Table 7 “D” score の比較

	group	$\bar{x}$ [D x]	S. D. [D(x)]	N	t
Ⅲ	cont.	1.06	0.98	67	2.60
	exp.	1.56	1.04	47	p<.02
Ⅳ	cont.	1.04	0.74	67	3.77
	exp.	1.65	0.98	47	p<.01

註 D(x)=Osgood's distance measure. $\sqrt{\sum_i dij^2}$

Table 8 変化の方向

factor response	Ⅲ		χ^2	Ⅳ		χ^2
	N	%		N	%	
no change	8	17.0	23.50 p<.001	9	19.1	48.11 p<.001
「+」response	26	55.3		31	65.9	
「-」response	13	27.6		7	14.9	

measure をつかつて比較検討してみた。結果は Table 7 の通りで、Table 6 とほぼ同一の差異を示した。(D score は、Ss の pretest と posttest の両反応における変動の距離の指標であつて、今の場合第Ⅲ、第Ⅳ因子の負荷項目群をそれぞれ i, 反応の 6 個のカテゴリーを j であらわし、pretest, posttest のそれぞれの i における j の変動の距離 distance の平方和を開平方してえられる。つまり $\sqrt{\sum_i dij^2}$ であらわされる。これは Osgood らがプロフィールの類似度の測定として提唱するものである。)

態度変容の方向： 青年の生活態度に対する討議過程の有効性が確かめられたが、このような討議効果がすでに知られている集団規準設定にともなう同調性 conformity にもとづくものかどうかは不明であるから、それらの事情を明らかにする意図をもつて、実験群 47 人の変化方向を検討した。結果は Table 8 に示す通りであつて、各実験小集団における自発的な集団規準設定にともなう、何らかの効果であることは肯定できた。表中の response のカテゴリーは、各小集団における討議前の成員の態度点（因子合成点であらわす）の平均値、つまり pretest における小集団平均値を基点として、討議終了後の各成員の態度点、つまり posttest における個人別態度点が、その基点の方向に接近するように変化している場合を「+」response、それと反対に基点より遠ざかるように変化しているものを「-」response、pretest と同一の態度点をとつたもの、つまり変動しなかつたものを no change であらわしてある。したがって表中の「+」response の明らかに多数をしめる事実からみる時は、集団基準設定にともなう同調性もしくは斉一性の存在が結論されるであろう。なおこの場合に、集団決定に関する何らの形式的操作が行われていない点を注目すべきである。ただし、さらに検討をすすめて変化の方向量を問題とする時は、この結論は一部分訂正されなければならないことになる。

変化の方向量： Fig. 1 および 2 はそれぞれ第Ⅲ因子第Ⅳ因子における 9 個の討議集団の成員別態度点の変動状況を示すものである。破線は前述の pretest における小集団平均値の水準——いわば当初に潜在していた集団標準 group standard ともいふべきもの——を示す。この図にみられるような態度変容の型はいわゆる集団規準への収斂もしくは同調性の現象とはやや異質的な型、つまり相互接近というよりはむしろ すれちがひ passing each other の傾向を相当に強く現わした。これは文字通りの収斂もしくは同調性ではないようである。

このような傾向をどう説明するかは、現在の資料では困難である。あるいは、一部分、集団決定の手続を形式

Fig. 1 変化の方向量 (Ⅲ)

Fig. 2 変化の方向量 (Ⅳ)

的に操作しなかつた実験条件にその原因が帰せられるかもしれない。しかし前項で明らかにとらええた「一」response への強い変動傾向を考慮にいれるならば、これは青年の生活態度の顕著な不確定性あるいは易変性を物語るものであるとの推定も可能と思われる。これは今後の検証をまつものである。

Ⅳ 要 約

(1) 第1部として、青年の生活に対する態度を測定して、その構造的特質を明らかにするために、予め作成した生活態度尺度をもちいて、157人の学生の反応をとらえ、これを、同様にしてえられた35~45才の成人の反応と比較しつつ検討した。

(2) 態度測定尺度の質問項目別の青年、成人両群の比較と、同じ尺度への反応を因子分析して見出した4個の生活態度因子にもとづく、両群反応の態度合成点の比較とによつて、青年の生活態度のいくつかの内容的特質を明らかにしえた。

(3) 第2部として、青年の生活態度傾向が実験的に設定された集団討議の過程によつて、どのように変容する

かを調べることによつて青年のもつ生活態度の確定性もしくは変容性の度合を明らかにしようとした。

(4) 集団討議過程は青年の生活態度の変容に十分に有効な機能を果たした。このことから青年のもつ生活態度が自らの *personality system* に十分に根を下ろしていないという、生活態度の不確定的特質が推論された。

(5) 集団討議にもとづく成員の態度変容の方向ならびに方向量の検証から、集団規準の自発的設定にともなう特殊な規準効果が明らかにされた。このことから青年における生活態度の易変性が推論された。

文 献

- (1) Asch, S. E. : *Social psychology*. New York : Prentice-Hall, Inc., 1952, 450—519.
- (2) 池内一 : コミュニケーション受容過程に及ぼす集団の影響. 心理学評論, 1957, 1, 101—116.
- (3) 藤野武, 岡路市郎, 福島正治 : 社会態度の因子分析的研究. 北海道学芸大学紀要, 第一部, 1953, 4, No. 2, 1—30.
- (4) Festinger, L. : *Informal social communication*.

- Psychol. Rev.*, 1950, 57, 271—282.
- (5) Fruchter, B. : *Introduction to factor analysis*. New York : D. Van Nostrand Company, Inc., 1954, 106—131.
- (6) Goldberg, S. C. : Three situational determinants of conformity to social norms. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1954, 49, 325—329.
- (7) Hovland, C. I., Janis, I. L., & Kelley, H. H. : *Communication and persuasion : Psychological studies of opinion change*. New Haven : Yale University Press, 1953.
- (8) Jenkins, W. L. : An improved method for tetrachoric γ . *Psychometrika*, 1955, 20, 253—258.
- (9) 岸田元美：意見の変化に影響する集団規準効果の研究. 心理学研究, 1951, 27, 105—110.
- (10) Lewin, K. : Group decision and social change. In T. M. Newcomb & E. Hartley (eds.) : *Readings in social psychology*. New York : Henry Holt and Company, 1947, 330—344.
- (11) 牧田稔他：集団決定と講義の行動変化に及ぼす効果の比較. 教育心理学研究, 1953, 1, 20—27.
- (12) McKeachie, W. J. : Individual conformity to attitudes of classroom groups. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1954, 49, 282—289.
- (13) Osgood, C. E., & Suci, G. J. : A measure of relation determined by both mean difference and profile information. *Psychol. Bull.*, 1952, 49, 256—262.
- (14) Osgood, C. E., Suci G. J. & Tannenbaum, P. H. : *The measurement of meaning*. Urbana : University of Illinois Press, 1957, 90—97.
- (15) Sherif, M. : Group influences upon the formation of norms and attitudes. In T. M. Newcomb, E. L. Hartley (eds.) *Readings in social psychology*. New York : Henry Holt and Company, 1947, 77—90.
- (16) Thurstone, L. L. : *Multiple-factor analysis*. Chicago : The University of Chicago Press, 1947, 161—170.

(1958年4月24日受稿)

STUDIES ON CHARACTERISTICS OF ADOLESCENTS' ATTITUDES TOWARD LIFE

By Okaji, Ichiro
Hokkaido Gakugei University

The aim of this paper was to study the next two points.

First, to measure and to examine the characteristics of adolescents' attitudes toward life by means of the attitude scales provided previously for this purpose.

In the second, to clarify the degree of instability of adolescents' attitudes toward life, observing how the trends of their attitudes are changed through the group discussion processes experimentally established.

Part 1: Measurement of adolescents' attitudes toward life.

Method and procedure: In the first place, the responses of students (157 Ss) to the attitude scales which were provided preliminarily for measuring their attitudes toward life, were obtained, and, those of adults (58 Ss) who had been selected in order to make a comparison with students, were also obtained. Both of those responses were then compared and analysed.

Secondly, using the composite scores computing for the four attitudinal factors on the way of living which were found by the factorial analysis based on the data obtained from the same attitude scales, the characteristics of responses of both the students and the adults were compared and investigated.

Result: Synthesizing the data obtained from the two procedures the following findings were obtained.

1) Both the groups of the students and the adults made considerably positive responses to the "un-eventful, easy, and petit-bourgeois" way of living, and there was no distinct difference between them.

2) Both the groups showed fairly positive responses to the "constructive, spiritual, and social-centered" attitude. There was, however, statistically significant difference between them: the students group

tended toward more negative direction on the attitudinal continuum than the adult group.

3) To the "sensational, pragmatic, and individualistic" attitude, both the groups responded more positively to some extent, and there was no essential difference between the two groups.

4) To the "nihilistic, negative, and fatalistic" way of living, both the groups of students and adults made considerably great negative responses, and there was no difference between them.

Part 2: The experiment of attitudinal change.

Method and procedure: Out of the subjects used in Part 1, forty-seven subjects and the sixty-seven were selected for the experimental and the control group respectively.

The former subjects were then divided into 9 small groups, and each small group was designed to have, between the pre and post-attitudinal tests, group discussions with reference to the theme, "how we should live in this modern society." The latter subjects were twice administered with the equal interval being asked to fill the same attitude test as the former did.

Results and discussion:

1) It was revealed that the group discussion processes were sufficiently effective for changing the adolescents' attitudes toward life. (See Table 6, 7) This result suggests that adolescents' attitudes toward life are not firmly introjected in their personality systems: their attitudes were rather unstable.

2) The direction of their attitudinal changes had an obvious tendency to move to the average level of the pretest scores, which can be called the "latent" group standard in each group.

3) when the directions of the change were considered quantitatively, as it is seen in Fig. 1, 2,

these figural patterns considerably differed from the "conformity" pattern, as they passed each other rather than approaching mutually.

The author concludes that these trends may indicate the indefiniteness and the changeability of the adolescents' attitudes with reference to their life.

A STUDY OF THE DEVELOPMENT OF AESTHETIC SENTIMENTS

By Hoshino, Kikuzo
Hokkaido Gakugei University

The object of the present study is to trace the development of aesthetic sentiments of the adolescents by examining their manners of grasping the meanings of the short sentences which contain aesthetic descriptions of the natural world. Thirteen sentences, each of which has different affective nuance, were selected. Each of those sentences has parentheses in the part and the subjects were required to fill it with many adjectives expressing relevant feeling of them as they chose.

The subjects were 389 males and 214 females, including those from a junior high school and the above college students.

The results were as follow :

In the quantity of feeling-expressing-adjectives, the differences between grades are significant, whereas that between sexes insignificant. In quantitative aspects, there is increase of words in the period between the 3rd grade of junior high school and the 1st grade of senior high school in both sexes, and between the 3rd grade of senior high school and college in females. The variety in expressing affect seems to be gradually increased, particularly great in the period between the 1st grade and the 2nd of senior high school. In females the expressions are more varied than in males.

A STUDY OF FINGER SUCKING OF CHILDREN

By Miyamoto, Minoru
Hokkaido Gakugei University

The present investigation aims at studying factors which may influence sucking behavior of school children in terms of their personality traits.

Out of 1354 elementary school children, 34 Ss were selected as a sucking group and 29 Ss as non-sucking group. The teachers in charge of the children were requested to fill series of questionnaires on sucking behavior in the period of infancy, and

childhood, and on family environment and nursery history of children in the both groups.

Results of this investigation revealed :

- 1) In addition to the sucking habit, most of the children of sucking group were found to possess in overlap some of its accompanied movements of biting and finger-touching habits.
- 2) Analyzing the situations where high frequen-